

背負投の技術的変遷に関する考察

重岡孝文*

A Study of the Technical Changes of Seoinage in Judo

Takafumi SHIGEOKA*

Abstract

Seoinage, as one of the kimewazas, is a trick to break the opponent's balance, put the back close under his breast, and throw him over the right shoulder in a circle. The techniques of Seoinage are also based on the principles of Judo so that the smallest power can be made most effective by many techniques. From the standpoint of Judo as traditional-culture technical changes of Seoinage can be found the trial for adjusting to the principles of Judo.

Once, the purpose of Seoinage in old Jujutsu stage was the training itself, and the spiritual peculiarity of Budo was regarded most important, partly because of the difference of the wears. But in modern Judo, the techniques of Seoinage have been developed as skills to win at sport competitions.

In the era of Meiji and Taisho, it was a "mortal trick" to force the opponent to be thrown down onto the tatami by gripping his wrist and lifting him over the bending back. In 1960's its techniques were polished up, and besides the reformation of wears and rules, Seoinage was regarded as a trick for Ippon.

Earlier Seoinage did not have splendor or smartness, but simplicity and powerfulness, and was accompanied by determination as kimewaza. In modern Seoinage, compared with the former one, it seems to be stressed that the players should fold the opponent's arms more skillfully, try many attacks, and get cleverly as many points as possible. Out of the changes in understanding Judo from fight to sport, techniques for not-kimewaza came to be made much of.

In Judo from now on, it can be forecast that technical development of Seoinage should be accelerated as a technique for winning Ippon. Though the training of body and spirit together, the effort is more and more necessary to complete the powerful techniques of Seoinage as kimewaza for Ippon by moving speedily, jerking powerfully and twisting the waist strongly.

KEY WORDS : 背負投の原則, 一本背負投, 両手背負投, 現代柔道における背負投, スポーツ化した柔道

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

背負投の原則

背負投は、相手の体を右前隅または前方に浮いたように崩し、自分の背部に相手の胸部より腹部にかけての部分に密着させ、右方越しに大きく円をえがくように投げ落とす技である。この投技は、技を施す要領によって「双手背負投」と「一本背負投」に分けられる。

柔道の原理から言えば、相手が押して来た時、自分はその力に逆らわず、順応して体捌きを行うと共に、その押してくる力を利用して引く。このようにすれば相手は、前方に体を崩し、倒れやすくなる。つまり自分の少しの力で相手を投げることができる。

具体的には右自然体を組み「受」を後方に押し崩そうとする。「受」は押されて後退するが、体制をととのえようと右足を踏み出して押し返そうとする。この瞬間をとらえて、「取」は左手で「受」の右腕を斜前上方に引きながら、「受」の上体をその右前隅に浮かすように崩し、「取」は「受」の右脇下に入れ、左手を引きつけて、「取」の背後に位置を取るようにして背負い、そのまま上体を前方に曲げ、両手を活用し、右肩越しに投げる。⁵⁾¹³⁾

このほか、「取」と「受」の間合いが狭すぎる場合は、右足を踏み込んで技を掛けるのが困難となるので、「取」は右足を引くことで間合いを保ち、タイミングをはかって、技を掛ける方法や、ケンカ四つの組み方の場合は、左足を「受」の中心に運び、技を掛ける方法等が考えられる。²⁾⁸⁾

柔術時代の背負投の特徴

明治大正時代の柔術を「柔術教授書・龍之巻」(野口正八郎著, 1913年刊)から引用してみる。この書では「體=体落系統技」にあたる背負投(手業)として位置づけがなされている。その内容を、「解説」の部分から検討すれば、図1に示したような施技であり、

(作り) 敵を右前隅に釣り込みて(釣り込みの方法は前に度々述べたから略す)、敵の体がやや前に浮き、其重心が右足の爪先に集まらんとし



図1. 体落系統技としての背負投
(野口正八郎, 1913)

第九十五図
背負投を掛けんとする瞬間



図2. 背負腰(野口正八郎, 1913)

第九十六図
背負腰を掛けんとする瞬間

たる時、我は右足を敵の右足の内側に踏み、腰を少しくかがめて、體を敵の前に廻し入れながら、左足を後方適宜の所に移すと同時に、(掛け)左手は敵の右手首に移して握り(或は敵の右外

袖を持ちたるまま), 右手は敵の右脇下より廻して, 其右奥袖(或は右肩の辺)を掴み, 我が右肩に敵の右脇下を密着せしめて, 前に引きつけながら, 腰を高めて上體を前にかがめる時は, 敵の體は我が右肩を越えて前に廻転して落つるのである(句読点を入れて, 一部, 読みやすくした)。

表現の方法は, 今日におけるそれと大きな相違点がある。柔術書の定義の中に, 器具に頼らず敵を防ぎ身を護り, 完全に身心の鍛練するを以て目的とする武術なり(野口正八郎, 前掲書)とされている。技のこまかい効果よりも, 格闘技としての荒々しい雰囲気を感じとられる。特に今日のように武道的要素からスポーツ化の傾向のますます強められていく時代においては, こうした柔術時代の背負投を見ると, 少なからずこちなさを感じる反面, 観点をかえれば, いかにも力強いという受け取り方も出来るように思われる。

柔道着も, 現在のように, 質もよくなり, 見かけも悪く, 上衣は半袖になっているため, 背負投イコール一本背負投を意味している。すなわち, 背負った瞬間は受の右腕を肩に担いだりしており, 柔道着との関連から, 引手の部分が手首を握っていたりしている。

また, 双手背負投は, 背負腰と呼ばれ, 引き手の位置も, 今日とは, 多少違っているように思われる。この背負投を, 図2に示した。

近代柔道における背負投の形

戦後柔道はスポーツとして復活したこともあって, 競技としての柔道が中心となって発達した。したがって武道からスポーツへ移行して来たことが, 勝敗を決する際の柔道に, 本質とは何かを考えさせるほどの技術的な面への大きな影響があったように思われる¹¹⁾。競技の技術が進めば進む程, 背負投における, 組み方, 崩し方, 掛け方等においても, 思考の拡大にともなって, 技術は試合本位に流されやすくなって来たといえよう。

ルールの変遷を見ても, 「武徳会柔術審判規定」(日本武徳会, 1900年)の中には,

「勝負は二本ニテ之ヲ決ス。但試合者双方一本ツツノ勝負アリタルトキハ, 更ニ一本1勝負ヲ試ミシム」とある。¹⁰⁾

近代柔道になってからは, 特に個人戦において, 僅少差でも勝負を決するようになって来た。それとともに, 背負投という技は, 本来, 決め技として使用されるのを通例としたが, 技の掛け数を増すためとか, ポイントを取るために使用するような場面が著しく増加した。じっくり組んで相手を崩してから掛けるというのではなく, むしろ技の効果が少しでもあればいいという背負投である。例えば, 引手を持たないで, 崩し方の襟と袖を両手で持ち, 相手を担ぎあげ, うつ伏せに叩きつけて技のポイントを稼ぐと言うような場面も見られる。投技を構成する重要な基本動作を考えれば, やはり理合にあった見事な背負投で勝負を決することが本義であることは異論のないところであろう。武道としての柔道をベースにすれば, その精神性の拡がり期待される反面, スポーツとしての柔道に対する背負投のおかれている立場は, 言い換えれば他の技にも共通する問題点と思われる。

(1) 背負投の施技の特徴

近代化以前の柔術における背負投は, 前述した野口正八郎の言葉(前掲書, 1913年)を借りれば,

右常対に組みたる場合, 敵が右前に浮き来る時, 我は敵の前に廻り込みながら左手は敵の右手首に持ち換え, 右手は敵の襟を放して其右奥袖の辺を捕り, 両手を以て前に引きつけると同時に, 腰を伸べてかがみ, 敵を前に投げるのである。この技について注意すべき点は, 敵の前に廻り込む時, 敵が我の右袖を持って居った場合には, 其為に支えられて容易に入ることが出来ぬばかりでなく, 強いて入らんとすれば敵の返し業に掛るおそれがある故, 成るべく敵が袖を捕って居らぬ時を選ぶべきものである。それにまた敵の胸腹部が我の背部に密着しなければ技は決して功を奏するものでないから, 廻り込みたる時, 彼我の体が密接しなかつたならば, 尚一層我が体を密着するようにせねばならぬ。(句

読点を入れて、一部、現代かなづかいに改めた)。

ここで言う背負投は一本背負であるので現在使用されている背負投とは、はっきり区別される。とくに、左手は通常であれば柔道衣を持っているが、袖が短いので、相手の右手首に持ち換えて技を施している点に特徴が見られる。なお、タイミングのとらえ方については、今日のそれと、ほぼ同一の方法と思われる。

武道から、スポーツ色を強めて復活した当初の柔道では、背負投の技術にも、若干の変遷が感じられる。すなわち「新柔道の手引」(竹田浅次郎著, 1953年刊)によれば、

互に右自然体に組み、右手にて右外袖を持っているとき、我が左手にて相手を前に釣り込み、重心をその両足先にかからしめながら、右足を相手の右足先内前に、同じ方向を向けて踏み込み、膝は少しく曲げ、その足先を軸として、我が体を左に廻り、同時に左足は後に、相手の左足の内側前に、相手の左足と同方向に向けて廻り込む。左襟を持った右手は、肘を曲げ、その曲げた肘は、我が左手で前に釣り出した相手の右脇下に入れ、我が背部を相手の胸腹部に密着させて背負うのである。次に、我が左手で前に釣り出した相手の右脇下に入れ、我が背部を相手の胸腹部に密着させて背負うのである。次に我が左手は、胸を張るようにしながら充分前に引き、膝を伸ばし腰を上げて、やや左に捻り尻を後に出し、両手を前下に引いて、上体を深く前に屈する時は、相手は我が右肩を越して前に倒れるのである(句読点を入れて、一部、現代かなづかいに改めた)。

技を掛ける際の要点を見てみると、相手を真前に釣り出して崩すことが強調され、そのためには両手の働きが大切であり、背負う時の膝は前に曲げないで左右に開き、それと同時に、背部を相手の前部に密着し、投げる際には尻を後方に上体を深く曲げて投げるように表現されている。⁸⁾

現代柔道における小谷澄之10段の背負投は、これら先人の技術を集大成して、改良された模範的なものと思われる。右手の襟の持ち方を正しく持つことと、180度回転して右肘を右脇下の所に正し

く密着させることを強調しており、このことは、深くはいりすぎたときに技の効果が減殺されること、あるいは肘を損傷する等の危険が生じることを危惧したものであり、一般に言われるスポーツ障害にたいする配慮もなされている。とくに両足の位置は、目安として、はっきり相手の両足の前内側に正しく置き、その幅は、自分の腰まわりの広さより狭い方がよく、それより広くなならないよう注意している。加えて、きわめて微妙な表現ではあるが、背負投を施す時、両者の上体、すなわち自分の背腰部と相手の胸腹部が斜めに密着する時の傾斜度、および左手の引く力とのバランスの重要性を指摘している。したがって、右臀部を出しすぎた時は、引き手をより強くしないと相手を背負いにくいという。投げに入る場合は、両膝間接を伸ばした瞬間に相手の体が浮くようになることと、顔は左に廻し、かかとをすこし浮かし気味にして、右肘を挺子の中心にして、腰と膝関節の屈伸により投げるところがポイントと説明している。

しかし「一人一技」として紹介された、岩田兵衛七段の背負投を見ると、相手の身長、体重、組み方により、自分自身の組み方、掛け方も異なると述べ、特にケンカ四ツの場合に、相手が脇あるいは胸を突張ってくる場面での効果的な背負投の説明がなされている。組み方は通常組み方ときほど変化は見られないが、崩し方にこれら先人と異なる特徴が見られる。自分の左手肘を、自分の左脇に引きつけ、相手の突張っている手首を、自分の脇にはさみ込む様にする、すなわち相手の突張りを外し、最後の投げる瞬間では、相手の手首を自分の脇下にはさみ込んで、あごを右肩へのせる気持で、体全体をひねるようにするという。相手の突張って押して来る直線の力を円運動に転換する妙は、柔能制剛の原理に近いものと思われる。

1960年代の背負投を完成した観のある丸木英二七段の場合⁷⁾、高校時代までの背負投が、以後ケタはずれの体格、体力を有する競技者と接して行き詰まり、家業の集材からヒントを得て、背の高さも同じ2 m以下の丸太を担ぐ要領で人間を担ぐ方法を考えたという。すなわち、相手を引き出す

のも、腰を低くして背負投を掛けるのも、すべて丸太の担ぎ方を基本とした。特に他と違っている点は、踏み込みの足である。左組みの場合、通常であれば、左足を踏み込んで、次に右足をまわして背負投をかけるところであるが、右足を廻り込みながら、右の引手を、小指を上に向けて上方へ引くと同時に、左の釣手では四指を襟に巻き、手首で相手のあごを突き上げるようにして肘を入れ、瞬間、膝のバネの反動を利用して、頭を真下に引き、相手に自分の体全体で乗りかかるようにしてとどめを刺すというものである。物言わぬ丸太が柔道の原理を教えてくれたと言う丸木の求道心が、切れ味のいい背負投を完成させたと思われる。

(2) 一本背負投の施技の特徴

正式にオリンピック種目に加えられた柔道競技で活躍した猪熊功8段の一本背負投も、時代を画する技術であったということが出来る。猪熊のそれは、技の掛け方として、左手を相手の右腕の上から取り、左手の強さを生かして、相手を大きく崩す一本背負投が得意であった。すなわち、特に相手が右足を出し体重を移す瞬間に、相手を前に引き抜くようにして小指を返し、円を描くようにして引き、右腕と右肩を、相手の右脇下へすくい上げるように勢いよく差し入れ、一気に自分の身体を回転させて投げるというものである。ここで強調されているのは、左足のまわり方が不十分では技の効果が半減するので、足の位置を、相手の両足の内側に持って行き、膝を曲げてつま先で立った体勢になり、相手の重心よりも、自分の腰が低く入ることを重視している点である。

1979年にパリで行われた第11回世界選手権無差別級において、一本背負を駆使して優勝した遠藤純男6段の場合は引手の持ち方に特徴が見られる。すなわち、引手を上から持った場合の意味合いは、相手の脇の下を深く握り、自分の肘を締めることによって相手の吊手を殺す意図が見られ、また引手を下から持った場合は、左手の脇の下を深く握り、柔道着の袖を締めて上腕を決め、自分の手首と肘を用いて相手の吊手を浮かす意味合いがある。この引手の方向は、右自然体から手のひらを外側

に向け、引手を目の高さに引くと同時に右足を一步踏み込み、相手を前方に大きく崩し、次に左足を引き寄せて、腰を相手にぶつけて跳ね上げるところに一番の特徴があり、体全体をあふりながら投げるきわめて特徴的な一本背負である。

ま と め

決め技としての背負投は、相手の体を崩しておいて、自分の背部に相手の胸腹部を密着させ、右肩越しに大きく円をえがいて投げ落とす技である。背負投の技術もまた、柔道の原理に即したものであり、その技は、最小の力で最も効果的な働きをもつよう。種々の工夫が成されてきた。したがって、柔道を伝承文化としてとらえるとき、背負投に関する技術的変遷は、柔道原理を充足させるための試みであったという事実を理解することができる。

かつての柔術の時代における背負投は、施技の目的が修練そのものにあり、柔道着の違いもあって、武道の特色を最大限に活かすという精神性が重視されていた。しかし近代柔道においては、競技としての柔道というスポーツ化の傾向のなかで、背負投の技術も発達した。明治、大正にかけては、手首を持ち背中を丸めて強引に畳に投げ落すなど「必殺技」としての感が強かったが、1960年代になると技も洗練され、柔道着の改良やルールの改正も加わり、比較的、個性的な背負投が定着し「一本」を取るための技としての認識が深まったように思われる。

昔の背負投には、華麗さやスマートさはないが、素朴さや、逞しさがあり、決め技としての意気込みが感じられた。それにくらべ今日の背負投は、相手より早く組み勝ち、相手よりも数多く技をかけて、巧妙に少しでも多くのポイントを稼ぐことに力点が置かれるようになって来ている。こうした決め技に至らない柔術技術を重視するという事実は、武道としての柔道から、スポーツ化された柔道という変容の中で育まれて来た認識であると理解させるをえない。

今後の柔道界における背負投の技術発達の方向

は、勝つ為の技術として、加速度を高めて行くことが予測される。昔から培われて来た身心の修練を通して、例えば、スピードに富む動きの中から生まれてくる背負投の体得や、強いパワーに裏づけされた引きつけ、腰の回転など、小手先だけではない背負投の体得により、一本を取る、決め技としての背負投を、技術的に完成させる努力が、一層、必要になるものと考えられる。

参考文献

- 1) 遠藤純男：得意技公開・背負投，柔道，53(12)47-49, 1982.
- 2) 井口義為：柔道極意教範，村田松栄館，東京，1934.
- 3) 猪熊 功：投技の解説・一本背負投，柔道，43(7)8-11, 1972.
- 4) 岩田兵衛：一人一技・私の背負投，柔道，38(1)42-44, 1967.
- 5) 嘉納履正：講道館柔道，講道館，東京，1956.
- 6) 小谷澄之：技の解説・背負投，柔道，291(6)42-45, 1958.
- 7) 丸木英二：得意技解説・背負投，柔道，46(2)43-45, 1975.
- 8) 三船久蔵：道と術，誠文堂新光社，東京，1954.
- 9) 野口正八郎：柔術教科書，帝国尚武会，東京，1913.
- 10) 老松信一：柔道の技術史，岸野雄三，多和健雄編「スポーツの技術史」PP199-240, 大修館書店，東京，1972.
- 11) 大沢慶巳：柔道入門，秋田書店，東京，1984.
- 12) 竹田浅次郎：新柔道の手引，巧人社，東京，1953.
- 13) 竹内善徳：柔道，不昧堂出版，東京，1979.